

【寄稿】

母校創立 100 周年の歩み-その記録 4-

名誉教授 西谷源展(44 回生)

1. 第 1 回生の卒業式を迎える

1928 年(昭和 3 年)5 月 30 日に第 1 回生の卒業式が島津製作所三階科学室にて挙行された。卒業したのは、17 名及び聴講生 4 名で合計 21 名であった。卒業生及び聴講生の就職先が学会誌「蛍光」に記載されているが東京帝国大学産婦人科教室等官公立病院 7 名、私立病院 6 名、未定 3 名、本校助手 1 名であった。就職先を確保するのは困難を極め、無給見学などもあり、北海道や上海など遠方にも就職先を求めている。

2. 修業年限の延長及び校名変更

1931 年(昭和 6 年)には医療技術の進歩に伴い履修内容に不足が生じ始めたために修業期間を 6 か月から 9 か月に変更し、入学定員も 25 名となった。また、校舎が木屋町二条で島津製作所三条工場から離れており、工場からの講師が不便であるために 1932 年(昭和 7 年)5 月に新校舎が出来上がり、三条工場西側に移転した。ここに移転してから学校らしい教育ができたとの校長である滝内政次郎は「透跡」(50 周年記念誌)の中で述べている。1935 年(昭和 10 年)校名を島津レントゲン技術講習所からレントゲン技術専修学校に変更した。修業年限は 1 年に延長し、入学定員も 30 名に増加している。第 12 回生からは 4 月入学、翌年 3 月に卒業となっている。1 年間の修業年限については昭和 26 年まで行われた。

3. 創立 10 周年記念式を挙行

1937 年(昭和 12 年)10 月 17 日に北白川の島津校主別邸において記念式典が行われた。学友会は同日に物故会員慰霊祭(於南禅寺天授庵)及び総会・懇親会(都ホテル)を開催した。創立 10 周年記念誌が学友会誌として発行されている。記念誌の中で、開設当時について長坂亀三朗氏は設立認可の申請では男女共学であったが、女子の入学は認められなかったことなど、学校設立当初の事を詳細に記述している。

10 周年記念誌によると、10 年間の卒業生は 281 名となっており、就職先等については次のように記述されている。

卒業生就職状況

官公立病院	103 名	個人病院	75 名	工業会社	22 名	官公衛	10 名
自営業	10 名	上級学校進学	11 名	兵役	5 名	その他	45 名

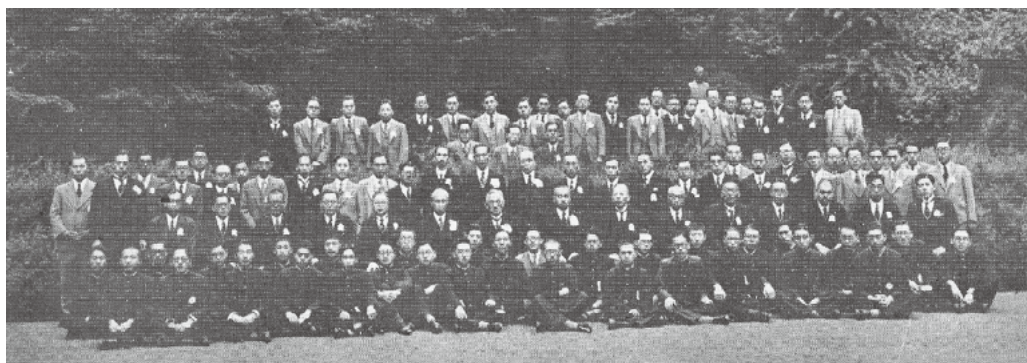
勤務地

海外 満州国	28 名	支那	2 名	台湾	11 名	朝鮮	9 名
国内 大阪府	30 名	東京府	26 名	京都府	21 名	兵庫県	16 名

愛知県 15 名 福岡県 11 名
その他、鹿児島県から北海道まで卒業生は分布している。

開設当初から就職では順調でなかった。当時のレントゲン技術者は大学病院などで徒弟的に無給にて養成され、その大学の紹介で医療機関に就職していた。一部では学校で養成された卒業生を異端視する者さえいたと記述されている。10 周年誌に記述された就職先を見ると海外となっているのが 50 名で約 18%にもなっている。海外の遠方にまで就職先を求めている状況を伺い知れる。

この時代は、高電圧を使用する X 線発生装置では防電撃ではなく、感電事故もあった。また、放射線障害も報告されていた。医療では必要な技術者であるが国家資格が制定されていなかった。卒業生などのレントゲン技術者は、医療では看護婦 1915 年(大正 4 年)、助産婦 1899 年(明治 32)に免許制度が制定されているため、レントゲン技術者の資格制度を強く要望していた。1927 年(昭和 2 年)頃には資格制度の確立をすることが求められていた。卒業生の中には更に勉学をして医師になる卒業生も出始めていた。学友会名簿 1960 年版等によると 1 回生~21 回生の中で医・歯科医師が 25 名となっている。特に第 4 回生(昭和 4 年 11 月卒)は 4 名、第 11 回生(昭和 10 年 1 月卒)は 6 名となっている。レントゲン技術者としての職業の法的な制定の声が多く出された頃であった。



以上

* 通巻 255 号 2025 年 4
月 0 日発行(2025-No.1)
より